

体育科

齊藤 嵩之 鳥山 大輔

体育科における学び続ける子供とは

体育科における学び続ける子供とは、体育の見方・考え方を働かせながら運動の楽しさや喜びを味わい、運動への意欲を高めたり、体育での学びを次の運動に生かしたりする子供である。

1. 目指す姿

体育科で目指すのは、体育の見方・考え方を働かせて、自分や学級全体の問題解決に取り組みながら学び続ける子供の姿である。子供たちが身体をつかって学び続けることで新たな動き方と出会い、運動の楽しさや喜びを味わったり、学習の前後で体育観やスポーツ観が変わるような体験を通して、子供のスポーツ文化の間口を広げたりするなど、体育科の学習が「豊かなスポーツライフの実現」の一端を担うことをねらう。

2. 子供の現状と課題（対話に着目して）

これまでの研究から、子供が運動と出合っただけで憧れや願いをもち、その実現に向けて友達と協力しようとするとき、子供たちは対話的に関わり合うことが明らかになった。対話を通して体育科の学習に取り組んだ子供は、仲間と共に運動を楽しみ、新たな動き方を身に付けただけでなく、ペアやチームの仲間との信頼関係も築くなど、副次的な効果が得られることも明らかになった。

体育科の対話における独自の特徴として、言葉によるやり取りだけでなく、身体を使って互いの動きを伝え合ったり、分かり合おうとしたりする点が挙げられる。個人間の技能差が、対話をしようとする心構えを阻む要因になることがあったが、差が大きいため、「分かりたい」「分かってもらいたい」というコミュニケーションにつながることも分かってきた。

一方、これまで学習課題の確認場面や振り返り場面、チームでの作戦タイム等の話し合い場面を安易に対話場面として見取ってきた。「運動の得意な子供の意見によって、苦手な子供の意見が封じられてしまう」ことも生じた。

そこで、体育科における対話場면을定義付けた上で、自分たちの問いの解決に向けて、自然と対話が生まれ、協働していく学習が展開されるように授業を構想することが重要である。留意したいのは、対話場面を大切にするあまり、実際の運動が少なくなってしまうことである。体育科における対話とは、運動とセットである。言語だけでやり取りされるものではなく、運動等の非言語も交えながら行う。このことを念頭に置き、子供たちの対話が生まれるように仕組んでいきたい。

何より、「失敗しても大丈夫」、「何を話しても仲間は考えを聞いてくれる」という心理的安全性を高めることが、身体表現を伴う体育科の対話における、最大の手立てになることを取って付記しておく。

3. 対話を通して学び続ける子供を育てるための具体的な手立てと想定される子供の姿

(1) 求める対話の様相

① 「決断」につながる、考えを伝え合う対話場面の設定

体育科では、対話したことを基に自分やチームの次の動き方を決断し、「実際に動く」ことで仮説の検証が行われる。「実際に動く」には、対話だけでなく、仲間と合意形成を図りながら、行動を「決断」することも重要になる。そこで、話し合い場面では、対話する場面なのか、決断する場面なのかを明確にして臨むことができるようにする。対話する場面では、まずは全員が意見を発表するようにし、発表された考えや表現に対しては、どのような内容だろうと関心をもって聴くようにする。「対話」と「決断」、そして決まったことを実践する（実際に動く）サイクルを繰り返すことで対話の効果を高めながら学習することができるだろう。

② 対話を促す教師のファシリテーション

教師はファシリテーション役として、子供の対話を促したり支えたりすることが求められる。焦点化された運動局面について話し合う場面では、運動局面の状況を整理しながら、端的に選択肢で示して子供が選ぶことができるようにするなど、子供全員が意思表示しやすく、参加しやすい内容から話

し合うことで、対話の土台が築かれる。

また、運動を試した結果を伝え合う場面でも、教師のファシリテーションの工夫があることで学びの質を高めることができる。子供は自分にとって最適な体の動かし方を試行錯誤の末に見付ける。当然、技能や体格によって運動の行いやすさには違いが表れる。この違いを対立関係で教師が位置付けると、対話ではなく、どちらが正しいのかという議論や討論になってしまう。運動を試す前の「なんのために」に立ち返って、両者の意図や背景を確認し、共通理解を得るようにファシリテーションをすることが重要になる。ハードル走を例に挙げる。運動を試した結果、「前傾したほうが走りやすかった」と「前傾すると走りにくかった」という正反対な考えが発表されたとする。この2つの意見を対立関係で位置づけるのではなく、単元を通して追究している「スピードを落とさないでハードルを走り越えるにはどうしたらよいか」というテーマに基づいて両者の考えが伝わるように対話を促す。これにより、技能や体格差から動き方に違いが表れたことが確認できる。さらに、両者に共通する点を探ることで、「重心を上下させない」というハードル走の本質に近づき、学びを一層深めることもできるだろう。

(2) 対話につながる授業のフレーム設計

① 子供の心理的安全性を確保する土台づくり

学級やチーム等の心理的安全性を築くことが、対話を成り立たせる土台となる。技能差があることを前提として、「運動が下手で失敗しても大丈夫」「上手に運動できなくても意見を聞き入れてもらえる」という雰囲気づくりが欠かせない。運動の得手不得手に関わらずチャレンジを歓迎することを学習の約束としたい。

② 対話のきっかけを生むルールや教具の工夫

ルールや教具等に制約を設けることで対話を仕掛けることができる。例えば、バレーボールの学習の際に、「サーブ前の10秒確認タイム」をルール化する。すると子供たちは、プレーが始まるリアルタイムの状況を生かして、自分たちの仮説や仮説の検証方法を確認するだろう。子供にとっての必要感を大切にしながら設定することが肝要である。

③ 対話を介して「分かる」と「できる」をつなぐ単元構想

単元計画を構想する際に、子供たちが協働しないと問いを解決できないように計画することが対話への必要感につながる。例えば、陸上運動のリレーでは、チームのベストタイムの追究から始めて、クラスのベストタイムの追究やクラス間のリレー大会の開催へと学習を展開することで、チーム間での関わりが生まれ、対話を生かした問題解決学習となる。

また、体育科では、自分の運動経験を抛り所にした考えをもち合っただ対話に臨む。故に、単元の序盤で「できる」を保証し、対話の素となる運動経験を積むことが必要となる。単元の中盤から後半では、序盤の「できた！」経験を基に、対話をしながら問いをつくったり解決したりする。そこで、単元の序盤では、「できる」を目指した効率的な反復練習や、多様な運動を扱って運動経験を増やすウォーミングアップ等を、帯学習として単元を通して取り組み続ける工夫も必要になる。その際は、練習の意味や目的を子供と共通理解した上で臨むようにする。

(3) リフレクションの仕方

① 形態の工夫

仲間とのリフレクションを重視して子供の対話に着目する。例えば、運動後に見ていた仲間からの具体的な事実やデータを基にしたフィードバックがあることで、自分の運動感覚と実際の動き、そして仲間の視点を生かした対話が生まれるだろう。また、チームで行う運動領域は、同じ相手と繰り返して対戦することや、対戦相手と共に振り返ることで、対話を促すことができるだろう。

② 取組を可視化して振り返るための ICT 機器の活用

リフレクションを効果的にするために、ICT 機器の活用が有効である。全ての場面を動画で撮影するのではなく、子供が何を試そうとしたのかが明確になるように局面を絞って撮影することで、リフレクションの精度が高まるだけでなく、仲間と対話を通したリフレクションにつながるだろう。